

Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO. 29

The PACIOLI SOCIETY JAPAN

2015. 09

◆ ジェイコブ・ソール著『帳簿の世界史』寸評

明清山西商人研究所 正木嘉宏

最近の著書には、一分野の領域を掘り下げるものから他の領域とコラボし、より高い視点からのものが見られる。情報化の進展により原資料を吟味した海外出版物が直ちに翻訳され読むことが可能になった。話題の『帳簿の世界史』（文藝春秋 2015年4月）もそのひとつである。上書の内容紹介と私見を綴ってみた。4章には、パチョーリ関連の記述や巻末には文藝春秋社編集部よりの日本語版特別付録「帳簿の日本史」もある。

THE RECKONING

THE RECKONING : FINANCIAL ACCOUNTABILITY and the RISE and FALL of NATIONS by JACOB SOLL BASIC BOOKS, New York, 2014
本書は **THE RECKONING** の日本語版で歴史学と会計学を専攻する著者がルイ 14 世の財務総監コルベールの〈The Information Master〉を執筆中に、本書の研究を始めたとある。

複式簿記こそが人類史の展開に決定的に重要な影響を及ぼしたととらえ、指導者が誠実な会計により会計責任を明確化すれば、国家や企業の繁栄につながるが、その実行と継続は難しく、会計体制ができて会計の三悪（怠る、無視する、操作する）により、押し戻されてしまう。その実例をスペイン、フランス、大恐慌から現代のリーマン・ショックまで拡張して紹介する。構成は次の通り。

Introduction

1. A Short History of Early Accounting, Politics, and Accountability
2. For God and Profit : The Books According to Saint Matthew

3. Medici Magnificence : A Cautionary Tale
 4. The Mathematician, the Courtier, and the Emperor of the World
 5. The Dutch Audit
 6. The Accountant and the Sun King
 7. The First Bailout
 8. “Fame and Profit” : Counting on the Wedgwood Vase
 9. Big Debts, Big Numbers, and the French Revolution
 10. “The Price of Liberty”
 11. Railroaded
 12. The Dickens Dilemma
 13. Judgment Day
- Conclusion

序章「ルイ 16 世はなぜ断頭台へ送られたのか」では、財務報告の会計責任問題に切り込み、会計責任を継続的に果たすことがいかに難しいかを知るために、700 年に及ぶ財務会計の世界史をたどる。よい会計慣行が国家や会社の基礎を安定させ社会を活性化するのに対し、不透明な会計とそれに伴う責任の欠如が社会不安を招いてきたことは歴史が証明している。ルイ 16 世が断頭台に散ったのは、秘密主義のもと隠されていた危機的財政状態が公開された時である。会計責任が大国の興亡に果たす役割は大きい。資本主義と近代以降の政府には、本質的な弱点があり、透明化の実行は難しく、倫理的・文化的な高い意識と意志が求められる。その継続はさらに難しい。会計の歴史は人と政治の物語であり、財政と政治の安定に欠かせない要素だが、信じがたいほど困難で、脆く、やり方によっては危険にもなる教訓である。

<私見>指導者の会計に対する責任の感覚が栄枯を左右する。フランス革命もリーマン・ショックも健全な会計感覚を失った帰結である。迷走中の新国立競技場建設問題は将来構想や資金・財政面の検討が不十分で、総括責任の所在も不明確である。財政赤字の中、過去の数倍もの巨額の出費には多くの問題がある。無謀な国家プロジェクトではないか。

1. 資本主義以前の古代会計（1 章から 3 章）

1 章「帳簿はいかにして生まれたのか」、古代の会計では、在庫管理や支出記録程度であった。会計報告書の監査は、不正疑惑発生時のみであり、厳格な監査は平穩を乱すと見なされた。会計は皇帝の個人監督下におかれていた。12 世紀イタリアのフィレンツェ、ジェノヴァ、ヴェネツィアといった商業都市国家に共同出資会社や銀行ができ、遠距離の貿易が発展した。それと共に資本主義的な利益や複式簿記が誕生した。フィボナッチの「算盤の書」も出版された。共同出資は、各人の持分や利益を計算する必要から、帳簿は単なる記録ではなく、出資者への利益剰余金の累計を計算するために活用された。帳簿は記録から責任の所在を明らかにするよう設計されていき、監査システムも義務づけられるようになった。

2 章「イタリア商人の[富と罰]」、トスカーナ商人ダティーニの商業文書・会計帳簿の記録をもとに教皇庁との金融取引や秘密帳簿に書かれた真実に触れる。教会法は、金貸業を禁じており金を扱う職業は常に罪の意識に苛まれていた。利益は悩ましい問題であ

った。最後の審判にあたり「心の会計」をバランスさせるため教会への寄付により赦免を受けられると信じられていた。教会は、富を貧者に分け与えるよう論じていたので、彼は遺言により巨万の富を教会に寄付した。キリスト教にこの贖罪符という会計文化を持ち込んだのは聖マタイである。

3章「新プラトン主義に敗れたメディチ家」では、メディチ家の光と影を追う。会計は事業経営を助ける一方で罣にもなりうるという二面性がある。コジモは、父の銀行を受け継いで大富豪となり、影響力も大きく、芸術のパトロンとして活躍した。会計の実務も経験していてギルドにも複式簿記を義務づけていた。各支店は支配人にまかせていた。ルネサンス期にプラトン研究が盛んになり、貴族的・エリート的価値観と商人の現実的価値観は次第に相容れなくなり、商売の知識と神聖なる学問のジレンマに悩む。コジモの息子たちには会計を指導しなかったため、衰退の道を歩むことになる。支配人のサセッティもまた新プラトン主義にはしり会計を軽視してしまう。リスクの大きい王族への貸付金が焦げ付き銀行の屋台骨を揺るがす出来事が起こり支店の閉鎖に追い込まれていく。これは後継者の維持がいかに難しいかを物語っている。

<私見>古代アテネでは、奴隷が帳簿係として雇われており、疑わしい時には拷問にかけられる。会計責任を果たすのは命がけの仕事であった。キリスト教では、徐々に法人や金利が容認されるようになった。経済活動が活性化し、市場経済の「ヨーロッパの道」と「イスラムの道」の分岐点がここにある。世界の各宗教が金利・法人・会計をいかに捉えているかの問題や寺院の会計帳簿研究をこれから深めていきたい。

2. 初期資本主義と中世会計 (4章から5章)

4章「[太陽の沈まぬ国]が沈むとき」の前半では、イタリア国内情勢とパチョーリの周辺が、後半はスペイン帝国が描かれている。当時イタリアの国内は戦場になっており商売に対する偏見があった。会計はタブー化され会計を風刺した絵画「金貸しとその妻」「二人の収税人」などが描かれ、会計帳簿に記入される取引は不正が多いと言いたげである。画家が描く両替商、収税人は不道德・不信心と結びついていた。『スンマ』は、



クエンティン・マサイス「金貸しとその妻」

ダティーニから数百年経ていたが、当時の簿記法を誰にでもわかるイタリア語で書かれていた。「秩序正しく計算し記録する」ための体系的な指針が明確に説明されていた。『スンマ』の会計に関する部分だけが抜粋されヴェネツィア式複式簿記として出回っていた。マンツオーニの『複式簿記と仕訳帳』もこの種のものであった。パチョーリは『スンマ』の中で聖パウロ等を引用し会計を真面目に行い几帳面で慈悲心のある勤勉な者は神が認ってくれると説き、勤勉・会計・利益は徳であると説いた。また借方と貸方の差額を計算すると言う教えを広め、神の秩序を人間世界に持ち込んで政府の会計と倫理規範までも指南した。スペインは植民地経営で膨大な富を得ながら会計は貧弱であった。会計人材はイタリアなどの海外に頼っていた。



フェリッペ2世はキリスト教同盟軍やネーデルランドの反乱軍と戦い軍隊の維持に経費がかかった。オヴァンドを財務長官に任命すると驚愕の債務が発覚する。次にトレグロサを任命、複式簿記で国家の財政を行うよう命じる。彼は、孫のソルルサノに命じスペイン語の『商人および他の人々のための帳簿と会計手引書』を出版し、会計人を育成した。彼の死亡によりスペイン帝国は衰退の道をたどる。

5章「オランダ黄金時代を作った複式簿記」ではネーデルランドで『スンマ』が開き『スンマ』を参考にしたオランダ語の優れた簿記書が多数書かれ、ヨーロッパ各地に普及して会計への関心が高まったのである。オランダ人が会計に習熟、定着させ、さらに国家運営に活用したと言ってもそれを維持するのは容易ではなかった。

オランダ東インド会社 (VOC) を持ち、貿易と植民地経営に乗り乗り出したアムステルダムは世界の品物があふれて

マリヌス・ファン・レイメルスワーレ「二人の収税人」

いた。会計学校では、計量法・両替・複式簿記が指導されていた。イピンによるオランダ語の簿記書も発行され、彼の死後その妻による『新しい手引き』は完全な帳簿の実例や為替手形の見本、そして記帳例などが豊富で、「期間損益計算」の先駆けもみられフランス語、英語にも翻訳され諸外国でも広く読まれた。木版画「商業の寓意」では、いかに複式簿記が重視されたかを示していて興味深い。どんな商売でも節度と慎重は報くわれるのでありそれを可能にするのは会計であることを暗示していた。

シモン・ステヴィンが登場し国家財政に複式簿記が活用された。彼は『数学の伝統』の中で「皇子のための会計」の章を設け公会計の重要性、年次期間損益を提唱し損益計算書・貸借対照表の原型を考案した。VOCは民間資本と国家資本が混成しており、市民は会社の株を買え、配当も受けることができた。この会社の空売り事件で株価の暴落がはじまり、事態收拾の不手際も重なり、さらに負債未計上の発覚などもあって、会計慣行の重要性を十分認識していた専門家がいたにもかかわらず、組織的な複式簿記は根付かなかった。これ以降、国家の会計は奨励され称賛されるも同時に恐れられるようになる。

<私見>資本主義の資本は時代の変化に対応しながら商業資本、産業資本、金融資本、情報資本へと移行し、そこに国家が関係してヘゲモニー国家が誕生し舞台がオランダからイギリス、アメリカへと変化していく。グローバル化による各種問題はここから始まる。

新しい研究によれば、資本主義の発生は地中海説ではなく北海・バルト海説や中世から近世の経済文明の中心はヨーロッパではなく、イスラム圏からインドそれに中国の南東部を含む東南アジアにあったとされる。最近、各国での防衛費増大の傾向が懸念されるが、国家を超えた地球規模の視点が求められるところである。橋本武久著

『ネーデルランド簿記史論』には、イピンやステヴィンについての解説やVOCの1社2会計システム(本国は旧来型で保守的・伝統的簿記法、在外商館は複式簿記)・長崎支店の優れた複式簿記等の記述がある。今後、「絵画に見える簿記風景」など

「簿記」と「絵画」のコラボの展覧会開催や研究の進展による若手による新説の研究書出版も期待したいところである。

3. 公会計の先駆者フランス（6章・9章）

6章「ブルボン朝最盛期を築いた冷酷な会計顧問」ではルイ14世の会計顧問コルベールによる会計改革にふれる。商業と会計実務を学び、枢機卿マゼランの個人財務顧問に登用されたコルベールは財産運用で頭角を現し国王の会計顧問を勤めたり、政敵の不正会計帳簿をおさえ追放したりする。国王に簿記の基礎を学ぶ必要があると進言し『スンマ』を教科書として「会社」を「国家」に置き換え指導する。フランス全土に会計の精神を広めると共に「サヴァリ法典」の編纂などをおこなう。この中には帳簿や財産目録、複式簿記に言及した条文もみられ、フランス国立図書館には「ルイ14世の帳簿」と題する帳簿が保管されている。彼は国王に宮殿建設、戦費の増大など苦言を進言した。国王は口やかましい財務総監に辟易するようになり彼の死後、真の報告は断たれる。

9章「フランス絶対王政を丸裸にした財務長官」ではネッケルが登場する。英語の *accounting* や *accountability* という言葉は、フランスからの輸入であり、「公会計」や「会計責任」という言葉はフランスで誕生した。この章では国家の財務会計の透明性の欠如を打破されるまでの過程を追う。ルイ16世の時代はアメリカ独立戦争の債務が増大していた。ネッケル財務長官は「国王への会計報告」を公表し、秘密のベールにつつまれていた財務運営の報告責任を果たした。民衆は宮廷費用・王室費の偏りに驚愕し政治観に目覚める。後日判明する軍事費の故意な除外なども発覚し、政情はフランス革命へ進む。この革命が財務リテラシーと会計責任の文化を政治に持ち込み未来の会計改革の道筋をつくった。

<私見>わが国の明治公会計制度を振り返ってみると『帳合之法』『銀行簿記精法』などが出版されプラガの複式簿記法の講義もあり明治11年に官庁に複式簿記法を採用すべきとの通達もでたが、諸外国の単式簿記・現金主義に歩調をあわせ、明治23年日本国憲法発布と同時にドイツのカメラル式単式簿記に逆戻りする。最近、発生主義・複式簿記を採用する公共団体が増加し「見える会計」が実施されてきた。国際公会計基準の公開や今年1月には総務省の「地方公会計の統一的な基準」が公表され住民に正しい情報を報告する義務と責任が求められることになった。透明化により財政再建を果たした事例として、公認会計士の指導のもと改革を断行した石原慎太郎著『東京革命』が必見である。公会計では、最初に消費税（付加価値税）を導入したフランスを注視したい。背景には哲学が教育の中に浸透している土壌がある。

4. 産業資本主義とイギリス近世会計（7・8・11章）

7章「英国首相ウォルポールの裏金工作」では、財務会計に精通している政治家ウォルポールを取りあげる。任期中いく度かの危機もあったが、会計を重視する文化が政治にも浸透していたことから乗り切れた。財務分析の導入・会計士を雇っての監査が実施された。しかし彼は、秘密主義者でもあった。議会の秘密委員会が南海会社の全貌を暴こうとするが会計主任の海外逃亡で責任を回避することができた。減債基金を流用して裏金を作り東インド会社の年金を払ったり、地租の引き下げに充当したりした。権力とは財布を握っていることである。

8章「名門ウェッジウッドを生んだ帳簿分析」、18世紀のスコットランドでは会計学校が次々に開校され、メイヤーの『組織的簿記』が出版され、女性にも簿記教育が行われていた。富は信仰心と会計の産物であるとみなされ、「心の会計」を日記に、財務を帳簿につけ会計がきちんとしていれば救済はいつそう確実になると信じられていた。経営に確率の概念を取り込み、原価計算を導入して会社を繁栄させたウェッジウッドがいた。蒸気機関を導入し「より少ないコストでより多く」を実践したが冷酷な現実直面した。公害が息子を苦しめ、後年、病気の治療の研究に資金を投じている。快樂と苦痛の収支尻を合わせ、富のみならず幸福を増やすことは困難な課題である。

11章「鉄道が生んだ公認会計士」では、19・20世紀のイギリス（帝国主義・産業資本主義の時代）が舞台である。財務会計はより複雑化し、時代に対応できず粉飾決算が横行する。産業の複雑な取引には新しい会計のニーズが生まれ、スコットランドに「会計士」というプロフェッショナルが誕生する。会計事務所も出現する。彼らはいち早くアメリカに進出する。固定資産を多く抱える鉄道の発達もあり、費用と資産の適正価値を評価するための減価償却の会計理論もここから生まれた。会計の専門家を育成する大学の教育も始まった。**<私見>**一般人の会計への関心の高まりと、専門家である会計士の時代への対応の必要性を強く感じる。グローバル化の現在、非英語圏であるわが国において人材を育成する教育面で大学や大学院において英語教育の充実ならびに国際会計教育基準（IES）とグローバル会計人材の育成は急務である。



トーマス・ヒッキー「ジョン・モウブレイと代理人」

公認会計士試験にも倫理や国際会計を重視することが求められる。今後は、多くの経験をつみ、知見を有している国・地域や機関との連携を通じ効率的な育成の成果を上げることが期待される。現職の頃参加した、アメリカでの国際会計教育学会（IAAER）の熱い討論の再来をぜひ次世代の研究者にも体験してもらいたい。現地ではアクティブ・ラーニングが実施されていた。

5. 金融・情報資本主義とアメリカ近代会計（10・12・13・終章）

10章「会計の力を駆使したアメリカの建国の父たち」ではアメリカ建国の父と会計の関連に触れる。フランクリンは生活のあらゆる面を会計の原則に従い管理したプロテスタント的職業倫理の理想像である。郵便処理に複式簿記を導入し、女性の会計教育にも熱心であった。ジェファソンは奴隷も帳簿に記録していた。ワシントンは帳簿をつける習慣を身につけていたので、書斎からは、メイヤーの会計教科書が見つかっている。モリスは、徴税を国家が一元的に管理し、歳入を増やす手法を導入し、複式簿記を徴税官や財務官に教え厳正な会計を実行させた。ハミルトンは「権力とは財布を握っていること」と述べ国家運営にあたっては、専門知識を備え強力な権力を与えられた閣僚があたるべきと主張した。

12章「『クリスマス・キャロル』に描かれた会計の二面性」では、会計の二面性、すなわち会計は善と秩序の道具にもなりうるが腐敗の手段にもなりうる現実を小説家や思想家作品を通じ紹介する。ディケンズは、『クリスマス・キャロル』で会計士や会計責任を描いた。ソローは『森の生活』で瞑想により精神の純化を、自然との共生を通じ自給自足を目指すべきで鉄道より土いじりを提唱した。ダーウィンは、日記作家のように日記と帳簿への記録を続けていた。テイラーは生産管理に会計手法を取り入れ分析をした。20世紀に入り会計士は公共サービスのシンボルとして再び尊敬をあつめた。

13章「大恐慌とリーマン・ショックはなぜ防げなかったのか」では、大恐慌、リーマン・ショックにふれる。会計士は公平なレフリーとしてまた有能な金融アナリストとして機能した。しかし、悪徳企業や無責任な政治家の前になすすべがなかった。また会計不正を指導するプロとして立ち回ってしまった。大恐慌を起こした株価の乱高下は、水増しのバランスシートにある。会計の複雑化が進み会計事務所のコンサルティング業務が増え、エンロンの不正取引や債務隠しによりアンダーセンの不正監査や黙認が明らかになり、金融危機が発生する。

終章「経済の破綻は世界の金融システムにくみこまれている」ではウイルスのように絶えず突然変異を繰り返す、金融技術やツールに会計が追いついていけない現状とその備えについて高い意識と意志の復権を唱える。「清算の日」回避のためには会計を文化の中に組み込めという。



ヤン・プロフォースト「死と守銭奴」

<私見>帳簿に目をそむけたり、操作すれば破綻を招く同じ繰り返しをしていることが明らかにされた。帳簿が時代と経済にいかに関連しているかを検証している。金融・情報資本主義の現在、金融を制するのは「情報」「帳簿」である。帳簿を握るものには、透明化を第一に、バランスを考え、宗教的・文化的な高い意識と意志をもち継続的に事にあたることが求められる。「東芝の不正会計」では、経営者の会計責任が焦点となっている。高い業績目標が重圧となり、損失の先送りや利益のかさ上げした可能性が大きい。また、「配当金重視の動き」や「記録を前提としない会計」の動向にも注目したい。投資家本位の会計もバランスが重要で過度な方向転換は会計操作を起こしかねない。帳簿を握るものには透明性・高い倫理観・バランス感覚・持続する強い意志等が求められる。人間の欲望拡張と会計・帳簿をめぐる責任問題は尽きな

い。なお、最後に「各識者の複式簿記の見方」を紹介しておきます。

アダム・スミス、カール・マルクス…経済と資本主義の発展に欠かせない。

マックス・ウェーバー…現代の企業では会計が大きな役割を果たすとし「近代的な簿記の手順に従って会計が行われることにより、企業の収益力が決定づけられる。」複雑な資本主義の発展には多くの文化的な要素が作用するが会計もその一つである。

ヴェルナー・ゾンバルト…複式簿記のない資本主義は想像も出来ない。両者は形式的にも実質的にも密接に関連付けられている。

ジョセフ・シュンペーター…会計を資本主義の支柱と位置づけ、会計慣行の歴史的
理解なくして有効な経済理論を打ち立てることはできない。

参考文献

- 1) 石川純治 『複式簿記のサイエンス』 (税務経理協会)
- 2) 奥村 宏 『資本主義という病』 (東洋経済新報社)
- 3) 加藤 博 『イスラム世界の経済史』 (NTT 出版)
- 4) 橋本武久 『ネーデルランド簿記会計史論』 (同文館出版)
- 5) 渡邊 泉 『会計の歴史探訪』 (同文館出版)
- 6) 工藤栄一郎 『会計記録の基礎』 (中央経済社)
- 7) 斯波照雄・玉木照雄編 『北海・バルト海の商業世界』 (白水社)
- 8) ロナルド・ドーア 『金融が乗っ取る世界経済』 (中央公論社)
- 9) 玉木俊明 『海洋帝国興隆史』 (講談社)
- 10) 佐伯啓思 『「欲望」と資本主義』 (講談社)
- 11) ロバート (ボブ)・H・ハーズ 『会計の変革』 (同文館出版)
- 12) ハワード・シリット/ジュレミー・パーラー 『会計の不正はこう見抜け』 日経BP社
- 13) 宇野邦一 『ドゥルーズ』 (河出書房新社)
- 14) 石原慎太郎 『東京革命』 (幻冬舎)
- 15) 柄谷行人 『帝国の構造』 (青土社)

(執筆者は日本パチョーリ協会会員です)

◆ 最近の出版の傾向

とにかくいま会計史が面白い。今回の The Reckonig(帳簿の世界史)にしても 28 号の Double Entry (世界経済史)にしても、数学の知識の発展と資本主義の歴史のなかで簿記発達を綴っていて、会計の発達を文化史としてとらえている。

少し以前の出版であるが、J.H.フラマン著山本紀生編訳『簿記の生成と現代化』(晃洋書房 2009)や渡邊泉著『会計の歴史探訪』(同文館出版 2014)、そしてトーマス・A・キング著友岡賛訳『歴史に学ぶ会計の「なぜ?」』(税務経理協会 2015)なども、簿記文献史ないしはその技術史と言うよりも、その時代の会計文化史として編纂していて、読み物として面白い。(文責三代川正秀)

The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

日本パチョーリ協会 〒171-0044 東京都豊島区千早 3-4-2 三代川正秀

Tel. 03-3955-8783 Email. mpacioli@aol.com <http://pacioli.world.coocan.jp/>